2024.1.13　白井市郷土史の会　令和6年1月例会　　蕨 由美

印西市の石造物－本埜地区の調査から－

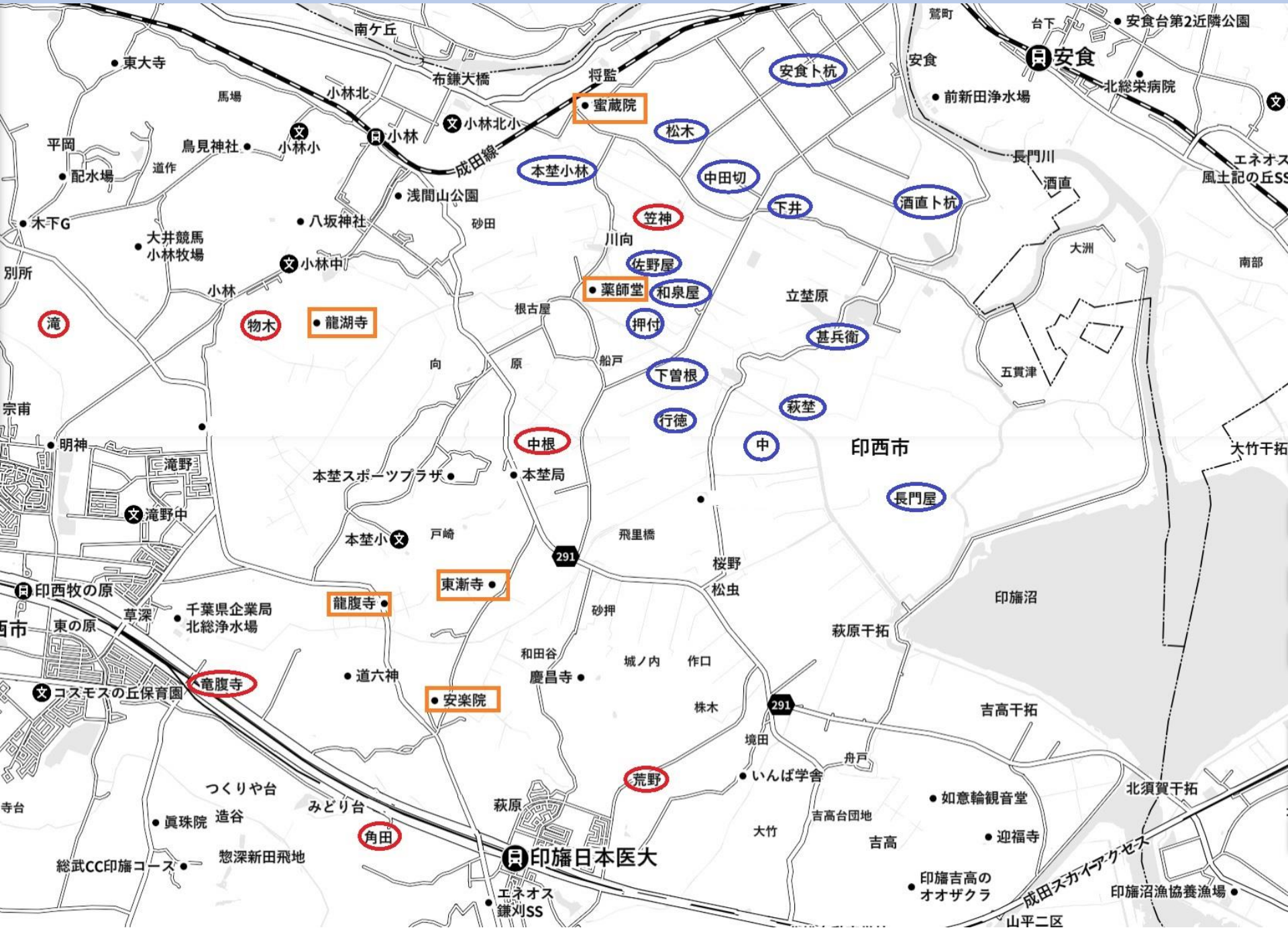
物木のムラ入口の庚申塔群

中根の福聚院の寛文9年（1669）銘
如意輪観音像十九夜塔

旧「本埜村」とは

- 「本埜村」は大正2年（1913）に本郷村と埜原（やわら）村が合併成立し、平成22年（2010）3月印西市に編入合併した旧村です。
- 本郷村は、台地上の中世から続く７か村で構成
  笠神村、中根村、滝村、龍腹寺村、物木村、荒野村、角田（つのだ）村
- 埜原村は、近世以後の新田開発による印旛沼畔の17の新田で構成
  小林新田、将監新田、松木新田、中田切新田、安食卜杭新田、酒直卜杭新田、下井新田、長門屋新田、甚兵衛新田、佐野屋新田、押付新田、下曽根新田、行徳新田、中根新田、和泉屋新田、萩原新田、松虫新田
- この本埜地区には、水神社・鳥見神社・八幡神社・稲荷神社など神社25社、真言宗豊山派の密蔵院、曹洞宗の龍湖寺、天台宗の龍腹寺・東漸寺・福聚院・南陽院・栄福寺・安楽院・瀧水寺の7か寺と、今は地区集会所などになっている庵跡、城砦跡や墓地などがあり、旧村の景観とともに、中世から現代まで多くの石仏や石碑が残されています。

旧本埜村（印西市本埜地区）


南ケ丘
東大寺
布鎌大橋
将監
安食卜杭
安食
鷲町
台下
安食台第2近隣公園
北総栄病院
前新田浄水場
馬場
小林北
蜜蔵院
小林北小
小林
成田線
松木
平岡
鳥見神社
小林小
道作
配水場
本埜小林
中田切
長門川
酒直
エネオス
風土記の丘SS
浅間山公園
下井
酒直卜杭
木下G
八坂神社
砂田
笠神
川向
大洲
大井競馬
小林牧場
小林中
佐野屋
南部
別所
小林
薬師堂
和泉屋
立埜原
滝
物木
龍湖寺
根古屋
押付
甚兵衛
向
原
船戸
下曽根
五貫津
宗甫
萩埜
行徳
中根
中
印西市
大竹干拓
明神
滝野
本埜スポーツプラザ
本埜局
長門屋
滝野中
本埜小
戸崎
飛里橋
291
桜野
松虫
印西牧の原
東漸寺
龍腹寺
印旛沼
草深
千葉県企業局
北総浄水場
東の原
砂押
萩原干拓
和田谷
城ノ内
作口
道六神
慶昌寺
竜腹寺
コスモスの丘保育園
安楽院
株木
291
吉高干拓
境田
舟戸
荒野
いんば学舎
つくりや台
みどり台
萩原
如意輪観音堂
北須賀干拓
寺台
眞珠院
造谷
吉高台団地
角田
大竹
吉高
迎福寺
総武CC印旛コース
惣深新田飛地
印旛日本医大
成田スカイアクセス
印旛吉高の
オオザクラ
印旛沼漁協養漁場
エネオス
鎌刈SS
山平二区

旧本埜村の風景　台地上の古刹

物木の龍湖寺

竜腹寺の龍腹寺

旧本埜村の風景　印旛沼を干拓した田んぼ

下井の鳥見神社
堤防（県道12号線）と干拓された広大な田んぼ

本埜支所から笠神城跡を望む

旧本埜村の風景　滝野のニュータウンとの境

寛政10年（1798）　庚申塔
滝野路傍
「天下泰平　寛政十戊午天／青面金剛王／
日月清明　十一月 朔日／講中十三人」

文政3年（1820）　庚申塔
竜腹寺地区の旧道入り口
「東　龍腹寺／西　草深／ふなお
／いたる／北　滝　きおろし」

庚申塔群の風景

物木の庚申塚
貞享3年（1686）の青面金剛像庚申塔から嘉永3年（1850）文字庚申塔まで8基の庚申塔が並んでいる。

押付の水神社
延宝3年（1675）の三猿像庚申塔から明治22年（1889）文字庚申塔まで10基の庚申塔が並んでいる。

庚申塔とは

庚申塔とは、60日に1回廻ってくる庚申の夜に、庚申講を行った記念の供養塔です。

庚申待の本尊は青面金剛像で、干支の申から、「見ざる・言わざる・聞かざる」の三猿像が加えられることが多いです。

庚申待では三年で十八回行うことを「一座」といい、初期はこの「三年一座」の記念に建立されました。

船穂　結縁寺青年館享保17（1732）

大森長楽寺　正徳5年（1715）

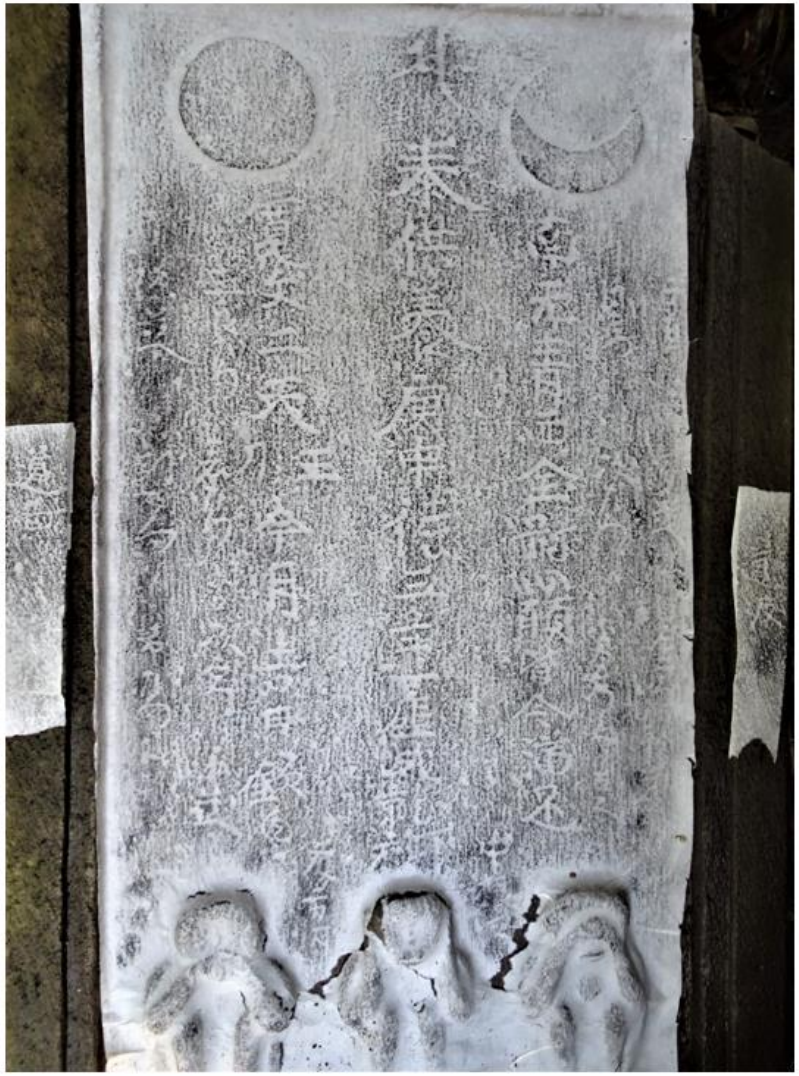
近世からの村落共同体建立の石塔を代表する石造物として、普遍的で数も多く、本埜地区でも、江戸時代前期から近代にかけて、多数の庚申塔が建てられ、その総数は281基を数えます。

うち、笠神の155基は、幕末と近代に建てられた2群の「百庚申」で、単独の庚申塔数は126基です。

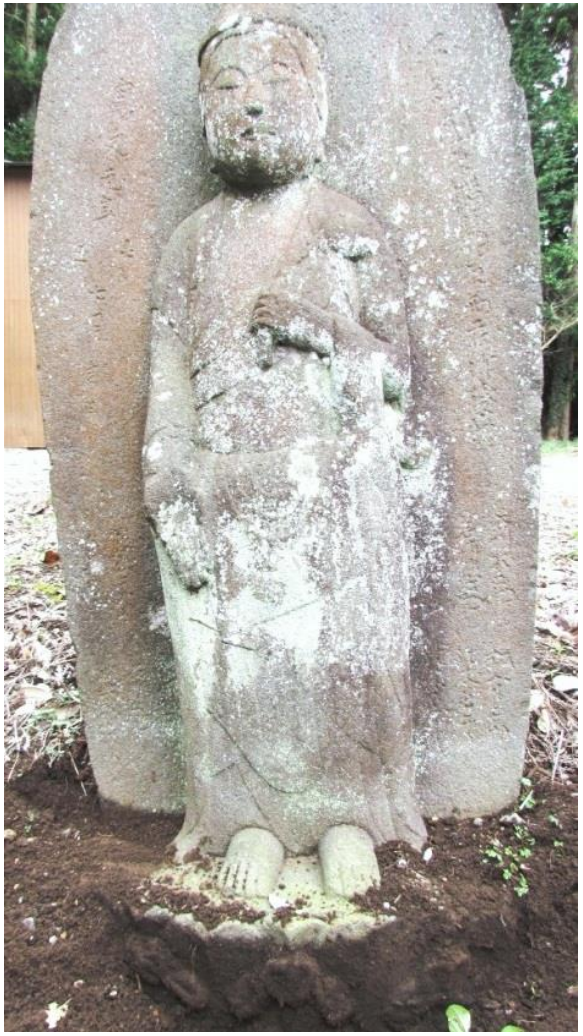
本埜地区最古の庚申塔

寛文2年（1662)銘　板碑型塔
中根　山林内

庚申塔（中根　山林内　寛文２年）

銘文	拓本
道沢 二良左ェ門　四良兵へ　彦右ェ門　□兵へ 孫右ェ門　次左ェ門　与五左ェ門　□良兵へ （月）南无青面金剛心願皆令満足 中根内 （サ）奉供養庚申待三年一座成就所 （三猿） 藤方内 （日）寛文二天壬今月吉日欽白 五良左ェ門　□左ェ門　次右ェ門　二良兵へ 源兵へ　新右ェ門　市左ェ門 道円	

印西市内の初期の庚申塔



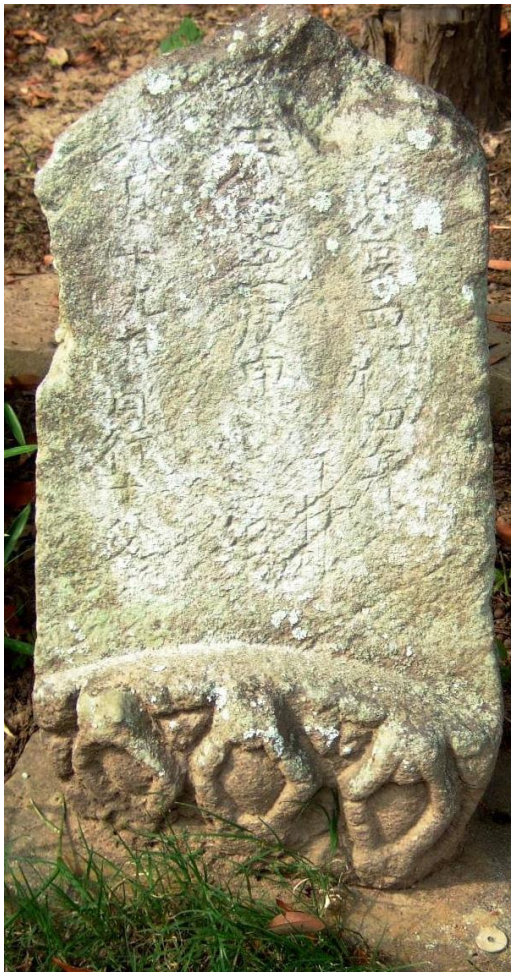
寛文元年（1661）　印西市最古
印西地区　竹袋観音堂
聖観音像庚申塔　蓮台に三猿像

寛文10年（1670）
印西地区　武西百庚申の隣

寛文11年（1671）
印西地区　砂田庚申堂内
二手青面金剛像と三猿

本埜地区の初期の三猿像庚申塔

延宝3年（1675）
押付4　水神社



貞享4年（1687）
酒直ト杭　水神社

元禄10年（1697）
将監　密蔵院

白井市内の初期の三猿像庚申塔

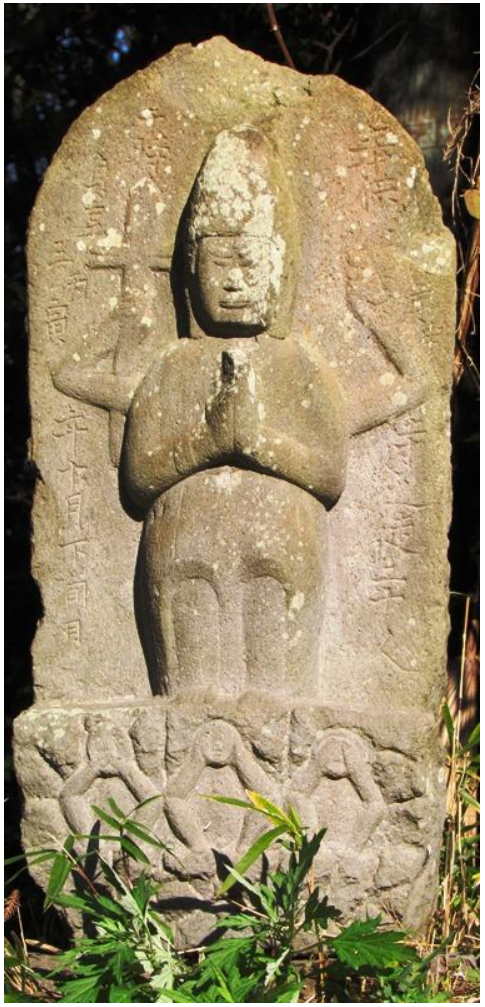
寛文10年（1670）
復・富ヶ谷 香取神社

寛文10年（1670）
谷田　庚申塚

延宝2年　1674
清戸　庚申塚

復・富ヶ谷 薬師堂
延宝3年（1675）

初期の青面金剛像のさまざまな姿



貞享3年（1686）
物木317　庚申塚

貞享4年（1687）
中田切38　白山神社

正徳2年（1712）
中田切　白山神社

地域的な特徴の中期庚申塔

享保3年（1718）
下曽根市杵島神社

印西市域・白井市・船橋市の東部・我孫子市・柏市・栄町で享保から宝暦年間（1718～1763）に特徴的な庚申塔。本埜地区では17基ある。

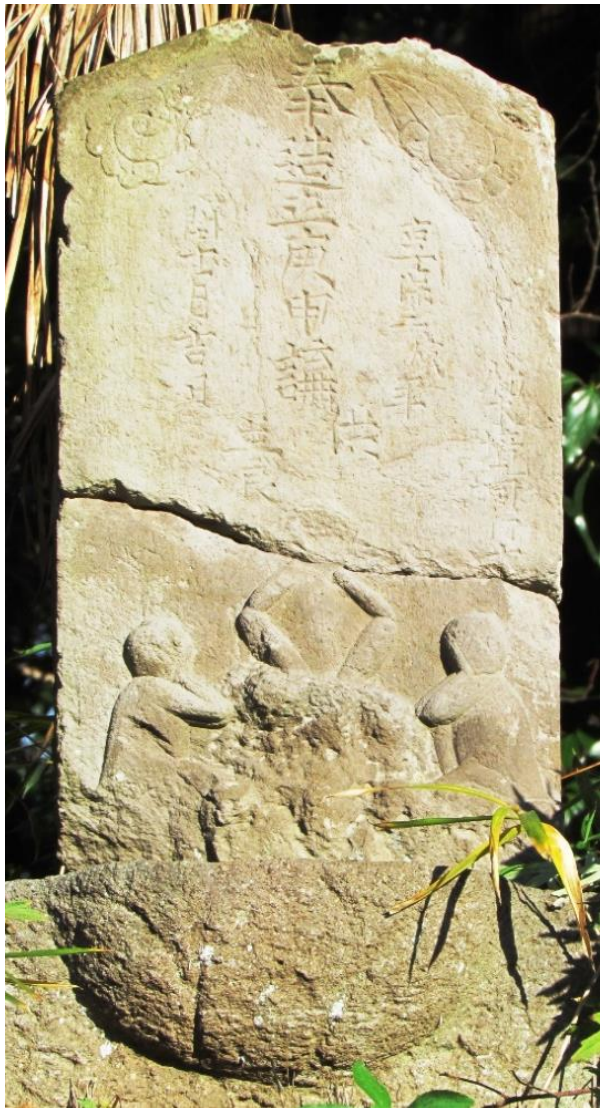
・主尊の目がアーモンド形

・右手に鈴状または人の頭部らしき袋状のものを持つ

・宝輪を持つ手が直角で水平

・迫力がない邪鬼がうずくまる姿

・中央が正面、両端が横向きの三猿像の構図

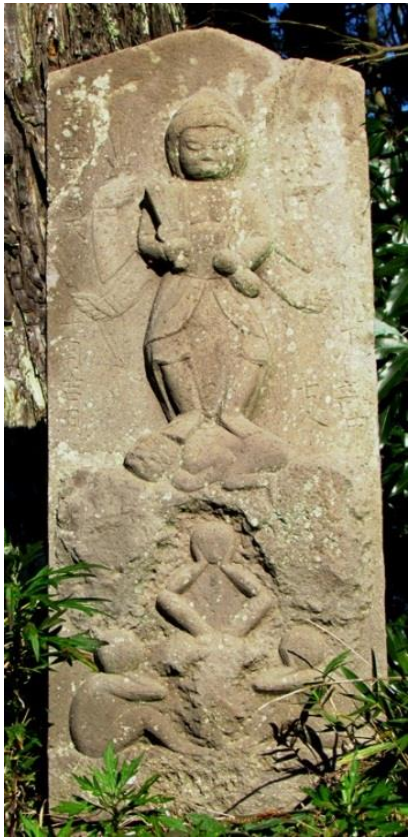


享保3年（1718）
物木庚申塚

画一的な特徴の青面金剛・三猿像の庚申塔

寛延2年（1749）
中根　笠神古墳群

宝暦2年（1752）
佐野屋　八幡神社



宝暦4年（1754）
物木317　庚申塚

宝暦6年（1756）
笠神　向公会堂

白井市内の画一的な特徴の青面金剛・三猿像庚申塔

享保20年（1735）
谷田　庚申塚

寛延3年（1750）
谷田　庚申塚

宝暦2年（1752）
清戸　庚申塚

寛延元年（1748）
河原子　阿弥陀堂

笠神社の百庚申

上：左側（北側）の列の奥には慶應二年塔が並ぶ

像塔18基と文字塔（「庚申塔」）82基

慶應三年塔が並ぶ右側（南側）の列

蘓波鷹神社の百庚申

明治16年（1883）～昭和10年（1935）銘の像塔6基と文字塔54基の計60基

道標付き庚申塔

庚申塔・道標　文化10年（1813）
中根の本埜第一小裏門入口
「北 笠神あじき／東 よし田　成田 江／
西 舟尾 江戸 江／たき村みち江」銘

庚申塔・道標　文政9年（1826）
滝・稲荷神社
「南 たき　さくら そうふけ ふなお 道／
北 ひらおか こはやし ものおき かさかみ 道」

道標付き庚申塔

庚申塔・道標　万延元年（1860）
竜腹寺路傍三差路

裏面	左面	正面	右面
万延元年庚申九月吉日	左ハ　かさがみ 小ばやし新田　道	庚申塔	右ハ　よしたか川岸よりなりた せとかしよりさくら　道

白井市内の一石百庚申塔＆道標付き庚申塔

一石百庚申塔　文化13年（1860）
復・法目　八幡神社前庚申塚

庚申塔・道標（「松戸道/行とく道」）　享和3年（1803）
木・所沢　鷲神社下庚申塚

二十三夜の月待信仰

二十三夜の月待信仰は、「月神の月天子は勢至菩薩の化身」と説く隋代の『法華文句』に由来し、月神の本地仏・勢至菩薩と二十三日が結びつき、月を拝み念仏する風習が広まりました。

荒野南の内の二十三夜塔群
文化年間～昭和13年　江戸期の二十三夜塔は道標付が多い。明治8年からは「女人講中」銘

本埜地区の二十三夜塔

寛文8年（1668）
本埜地区最古の二十三夜塔
物木の諏訪神社念仏堂跡

寛文10年（1670）銘の勢至菩薩像塔
中根の釈迦堂跡墓地

天保10年（1839）　二十三夜塔
中田切三区ｺﾐｭﾆﾃｨｾﾝﾀｰ

道標付き二十三夜塔

左ハ　つくりや
江戸　道

文化10年(1813)二十三夜塔・道標
荒野南の内の二十三夜塔群

右ハ　きおろし
あびこ　道

文政10年(1828)二十三夜塔・道標
荒野南の内の二十三夜塔群

十九夜塔とは

旧暦１９日の夜、女性が寺や当番の家に集まって、講を開き、如意輪観音の前で経文、真言や和讃を唱える行事を「十九夜講」と呼び、関東北東部で盛んに行われていました。

十九夜講が、祈願の信仰対象あるいは成就のあかしとして建立する石塔が「十九夜塔」で、主に、右手を右ほほに当て首をかしげ、右ひざを立てて座る姿の如意輪観音像が主尊として彫刻されています。

「十九夜念仏供養　二世安楽」などの銘文と、如意輪観音像を刻んだ典型的な十九夜塔が盛んに建てられるようになるのは、千葉県内では、寛文5年（1665）印西市の小倉青年館の石塔からです。

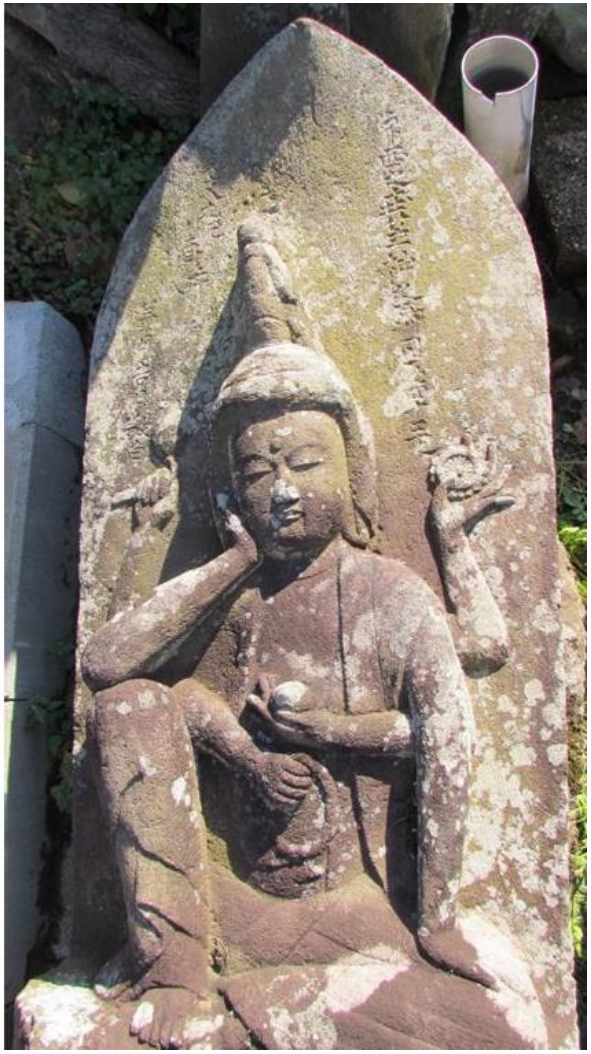
寛文5年（1665）小倉青年館

本埜地区の最古の十九夜塔

本埜地区では、寛文九（1669）年の中根の福聚院の六臂如意輪像塔が初出です。

同じく寛文九年銘の笠神青年館（原堂）墓地の六臂如意輪観音像塔も、「十九夜」の銘はないが、「印西之庄笠神之郷同道四十三人」とあり、十九夜塔と推定されます。

寛文9年（1669）十九夜塔
中根福聚院



寛文9年（1669）如意輪観音像塔
笠神青年館（原堂）
「印西之庄笠神之郷同道四十三人」の銘

本埜地区の江戸前期の十九夜塔

寛文期から正徳期までの江戸前期の十九夜塔は推定も入れて22基、特に延宝期の塔は9基を数えるなど、本埜地区は、北総でも早い時期から造立が盛んな傾向があります。

その理由として、十九夜塔発祥の利根川中流域にあり、また龍湖寺や瀧水寺など女人信仰の篤い寺や女人講が盛んな地区が多いことがあげられます。

寛文10年（1670）十九夜塔押付・薬師堂

本埜地区の江戸前期の十九夜塔

延宝7年（1679）
安食卜杭青年館

元禄12年（1699）

正徳2年（1712）

白井市内の江戸前期の十九夜塔

寛文10年（1670）
平塚　延命寺

元禄13年（1700）

寛文11年（1671）
名内東光院

延宝3年（1675）
復　仏法寺

子安像塔の十九夜塔から子安塔へ

宝暦五年（1755）行徳稲荷神社の「十九夜念仏講」造立の十九夜塔の主尊は、思惟相が如意輪観音の赤子を抱く子安像となり、その後は、子安像塔へと次第に置き換わっていきます。

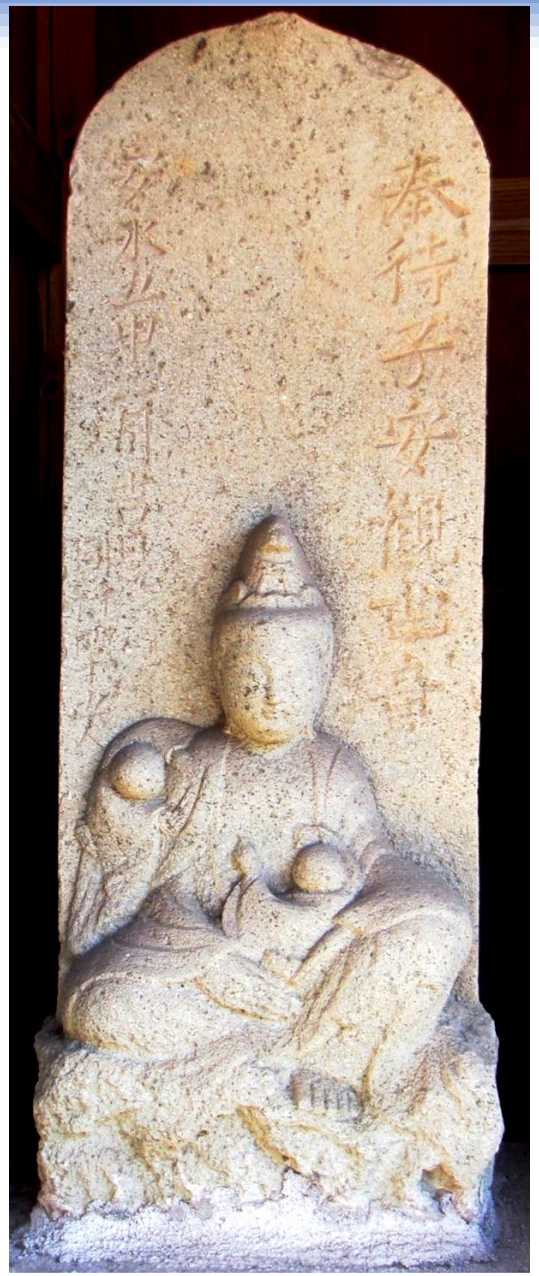
そして、江戸中期までの十九夜塔に替わって、北総の女人信仰の石塔は江戸時代後期から徐々に、そして近代以降現代まで、そのほとんどが「子安観音」や「子安明神」の主尊を子安像として浮き彫りした子安塔となります。

江戸時代のはじめ、二世安楽を念誦する念仏講から　女人成仏を如意輪観音に祈願する十九夜講へ発展した女人講は、さらに、江戸後期からムラのお嫁さんが安産子育てのご利益と親睦を目的に集う子安講へ変わっていきます。

宝暦5年（1755）行徳 稲荷神社

特徴ある本埜地区の子安塔

・主尊が正面を向く
・肩と胸元に二人の小児を
配する特徴を持つ子安像塔



安永5年（1776）　滝・瀧水寺

安永3年（1774）
栄町　南集会所

安永8年（1779）下曽根市杵島神社

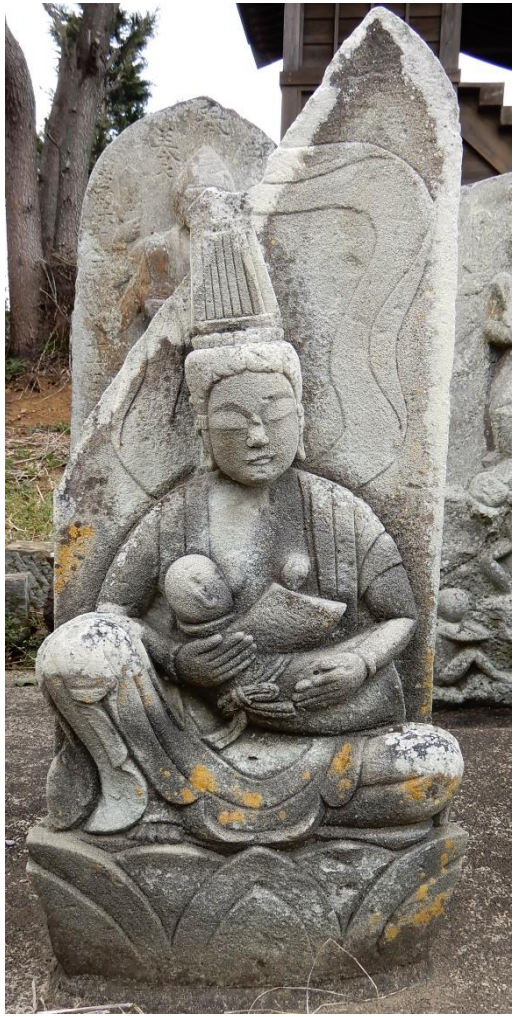
特徴ある本埜地区の子安塔

寛政8 年(1796)滝　瀧水寺

文政13年(1830)行徳稲荷神社

天保2年(1831)將監密蔵院

本埜地区の子安塔-江戸後期から近代へ



元治元年（1864）中　八幡神社

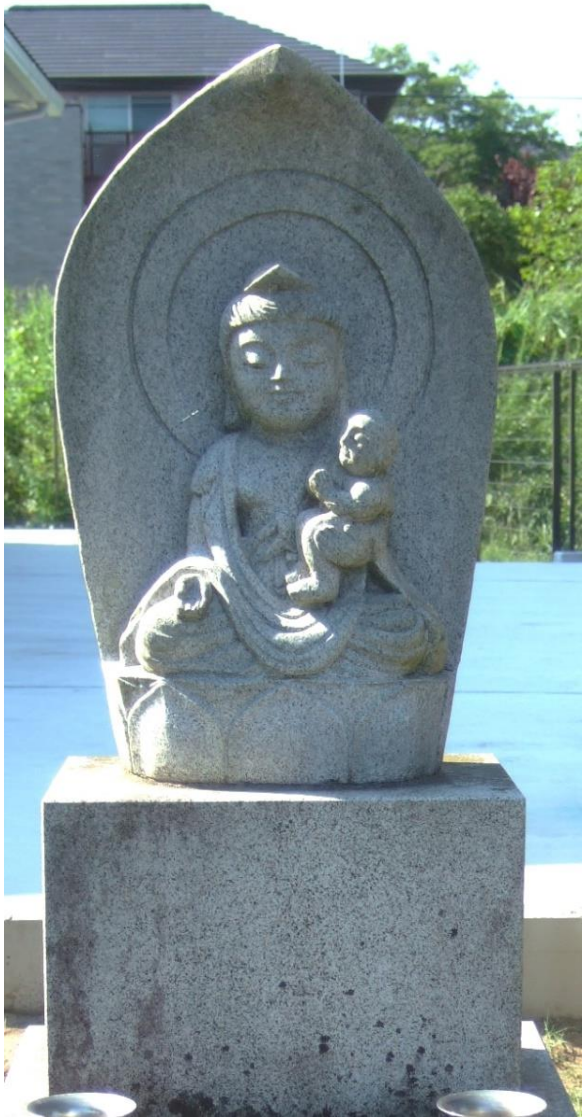
明治23年（1890）下曽根市杵島神社

大正11年（1922）小林水神社

本埜地区の子安塔-近代から現代へ

昭和16年（1941）酒直ト杭水神社

昭和61年（1986）角田栄福寺



昭和62年（19872）安食ト杭　青年館

白井市内の子安塔

文化6年（1809）
中木戸観音堂

天保10年（1839）
向台薬師堂

弘化3年（1846）
中　薬師堂

大正8年（1919）
法目仏法寺

白井市内の子安神を祀る石祠の「子安塔」

寛政12年（1800） 平塚鳥見神社
子安大明神石祠

文化3年（1806）河原子天神社
子安大明神石祠

文政13年（1830） 今井青年館
子安像石祠

十五夜塔・十七夜塔

十五夜塔　天明八年（1788）
物木諏訪神社念仏堂跡
銘「奉需十五夜當村講中」

十七夜塔　元文5年（1740）
行徳　稲荷神社・大日堂
蓮台を持つ観音菩薩立像
銘「奉供養十七夜講中廿二人」

二十夜塔

寛文9年（1669）二十夜塔
物木諏訪神社念仏堂跡
蓮と錫杖を持つ十一面観音立像
銘「二十日夜念仏供養
奉十一面観音・・」
錫杖は修験行者の「手持ち錫杖」
衣も短めで「遊行する観音」の印象
奈良の長谷寺の造営のため、全国を行脚した勧進聖によって語られた長谷観音の霊験譚の信仰を反映している

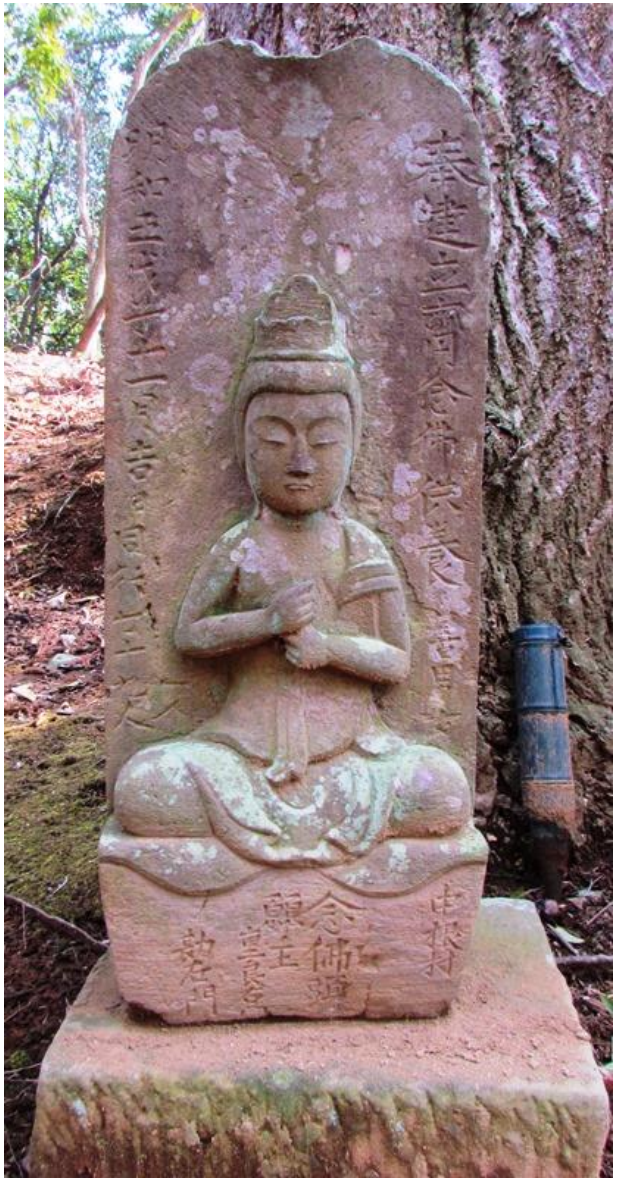
明和元年（1764）二十夜塔
物木諏訪神社念仏堂跡
如意輪観音像
「廿日搆供養塔」銘

二十六夜塔

安永8年(1779)　二十六夜塔・道標
荒野の南之内二十三夜塔群
銘「奉待廿六夜講中／南ハいん〔　〕
／西ハ（き）おろ（し）／女人講中」

安永9年（1780 ）　二十六夜塔
地蔵菩薩立像　　中根釈迦堂跡墓地
銘「奉建立廿六夜待供養」

大日如来像塔



大日如来には悟りを得るための智慧を象徴する金剛界と、無限の慈悲を象徴する胎蔵界いう二つの捉え方があり、二つ揃って密教の世界観が構成されている。

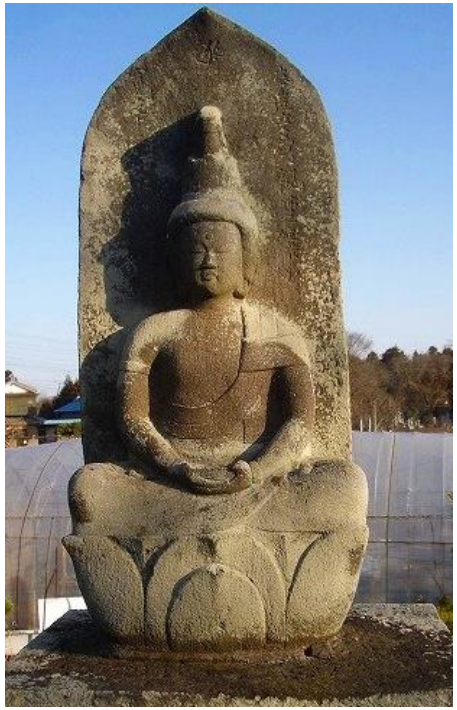
金剛界大日如来は智拳印、胎蔵界大日如来は定印を結ぶ。

明和5年（1769）
念仏塔（大日如来像）
中根・戸崎観音堂
「奉建立齊念佛供養善男女／同行七十九人」銘

「齊念佛」の「齊（とき）」とは、法会の際の僧侶の食事をさし、仏と飲食を共にすることに特別の意味をもつ念仏講が行われていたと推察されます。

安永8年（1779）念仏塔
（大日如来像） 押付・薬師堂
「念仏供養押付講中十五人」銘

白井市内の大日如来像塔



寛文12年（1672）
榎台入口大日塚
胎蔵界大日如来

明和元年（1764）
平塚延命寺

天明3年（1783）
金剛界大日如来

安永5年（1776）
復 上長殿熊野神社

地蔵菩薩像塔

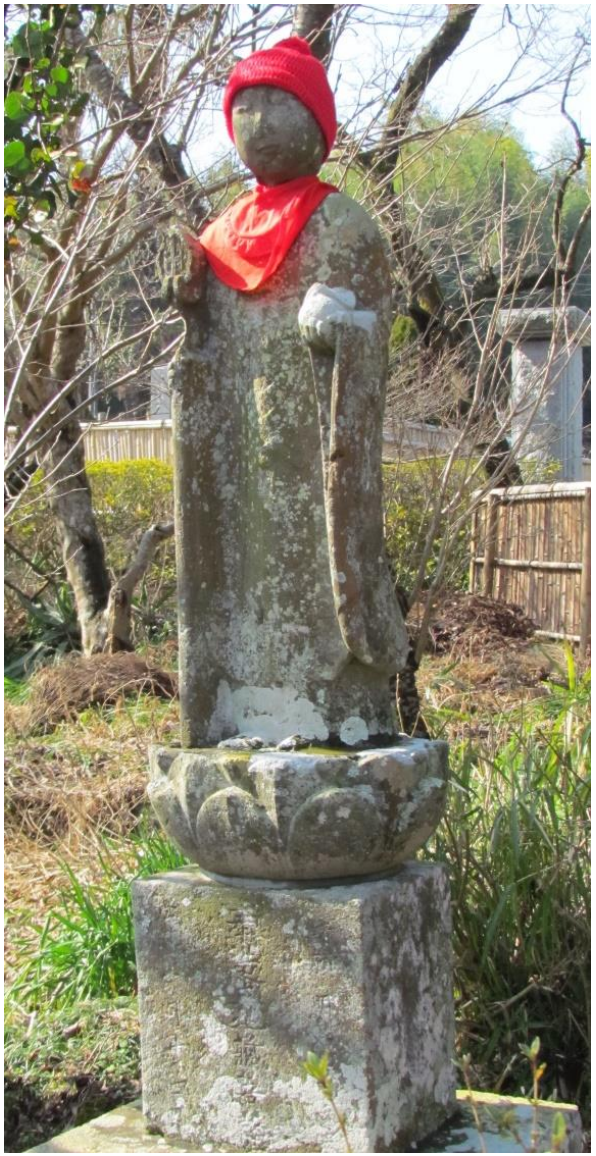
地蔵菩薩像塔（女人講）
中根・戸崎観音堂

右：天明2年（1782）
左：昭和5年再建
地蔵菩薩像塔
中根・門屋敷畑入り口

地蔵菩薩は、釈迦の入滅後、弥勒菩薩が現れるまでの無仏時代の衆生を救済することを釈迦から委ねられたとされ、苦悩の人々を、その無限の大慈悲の心で包み込むことから中世から石仏として最も親しまれました。また、中国の十王思想で「地蔵王菩薩」として閻魔大王と同一との信仰により、死者の救済のため霊界との境に多く建てられた。

一般には剃髪した僧侶の姿で袈裟を身にまとう。左手に如意宝珠、右手に錫杖を持つか与願印をとる像が多い。光背型のほか、台石上高く祀られた丸彫像も多いが、地震などで損傷し分離しやすく、完形で残っている丸彫塔は貴重。

地蔵菩薩像塔



明和4年（1767） 地蔵菩薩像塔　物木・龍湖寺

明和5年（1768） 三界萬霊塔　将監・密蔵院

地蔵像廻国塔

享保12年（1727）地蔵像廻国塔
笠神・南陽院

「日本回國」の銘があるこの廻国塔とは、日本全国六十六部を廻国巡礼した記念の供養塔。

享保18年（1733）地蔵像廻国塔
笠神・向公会堂

六地蔵塔

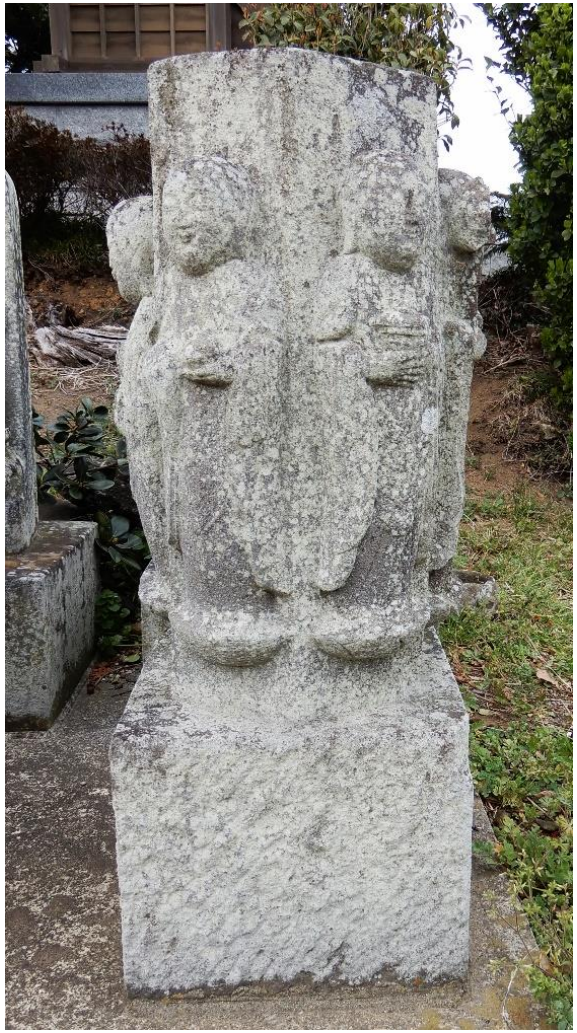
正徳2年（1712） 六地蔵塔
物木・龍湖寺

明和3年（1766）～寛政3（1791）
六地蔵塔（丸彫像） 角田・栄福寺

地蔵菩薩の像を6体並べて祀った六地蔵像は、道輪廻の思想に基づき、六道のそれぞれを6種の地蔵が救うとする説から生まれたもので、寺院や墓地入り口に多くみられる。

一石六地蔵塔

宝永4年（1707） 六地蔵灯篭
龍腹寺



嘉永三年（1850）
中・八幡神社の六地蔵像六面石幢

大正12年（1923） 六地蔵石幢
荒野コミュニティセンター

花見堂地蔵とは

花見堂地蔵とは、合掌型地蔵像の光背に「花見堂」などの銘、造立日が宝永～文化年間で三月三日や三月吉日が多く、「童男童女」「子供中」などの子供に関わる銘がある小型の地蔵塔である。

印旛沼北西部に26基と関連が検討中の10基、それに先行するさいたま市内など10基が報告されている。

おそらく旧暦の3月子供主体に地蔵様を祀り飲食した行事であったろうと推定されますが、その実態は不明です。

享保15年（1730）の花見堂地蔵
印旛地区岩戸の山林内宗像神社
銘「花見堂／子共造立／古谷」

享保18年（1733）の花見堂地蔵
和泉屋氷川神社　銘「童男童女華見堂」

花見堂地蔵像

宝暦10年3月3日（1760）
銘は「奉供養花見堂地藏尊」

中根903-2丁字路傍の花見堂地蔵

寛延2年3月3日（1749）
銘「花見堂地藏尊／同行十人」

馬頭観音塔

瀧390地先の馬頭塚

馬頭観音は変化六観音のひとつで、憤怒の相が多く、衆生の無智・煩悩を排除し諸悪を毀壊する菩薩として信仰されてきた。

民間信仰ではその「馬頭」という名から馬の守護仏、畜生類を救うとされて、その石仏は路傍やソウマンド（馬・動物の墓）に供えられた。

本埜地区では、安永7年からの刻像塔が8基、文政10年以降の「馬頭観世音」銘の文字塔が18基、計26基がある。

竜腹寺464路傍

馬頭観音塔

安永7年（1778）
瀧390地先の塚

天明三年（1783）
本埜小林墓地

享和三年（1803）
瀧390地先の塚

馬頭観音塔

文化3年（1806）竜腹寺・道六神前の辻

慶應3年（1867） 将監・密蔵院

白井市内の馬頭観音塔

平塚延命寺の馬頭観音塔
天明3年（1783）

清戸庚申塚の馬頭観音塔
寛政7年（1795）

聖徳太子像塔

物木の龍湖寺本堂左前の聖徳太子像塔
両手で柄香炉を捧げ持つ「孝養太子像」である。
年銘なし、台座に「房陽平郡／山崎松林英徳／造之」の銘がある。

富士信仰の石祠

延享2年（1745） 滝　白山神社
「富士浅間宮／講中」銘の石祠

明治12年（1879） 竜腹寺　浅間神社
「仙元神社」銘石祠

富士講とは

　関東には、近世・近代の富士講が関連する石塔が多数あります。
中世に噴火が鎮まると、修験者による修業としての登拝が可能となり、近世になると開祖の長谷川角行や食行身禄らの行者の荒行とその験力、教えが一般の人々に広められ、後継者によって関東各地に富士講の「代参講」が組織されて、爆発的に富士信仰が流行しました。
　代参講は、数年間を単位に、地域の先達・講元・世話人の役職と講員数十名によって組織されます。
　講員は、講を代表して輪番で1回は登拝でき、その代参費用は月並講などで集めて積み立てられた講費が充てられました。

富士講代々図（天保３年・身禄百年忌発行）
月行は月旺の弟子になっている。

　先達は、上吉田の御師から許された「行名」を名のり、三十三度以上の登拝を成就した先達は「大先達」と呼ばれ、尊敬された。また三役と講員で毎月一回拝みを行う「月並講」も開かれていました。

笠神の浅間神社

- 本埜支所の西約500m、台地先端の山上にある。
- 塚の上に明治14年（1881）の石祠、祭神木花開邪姫を祀る
- 明治20年～昭和23年までの富士講碑6基
  総高1.5～2.1m、人名銘78～160人、山包講紋あり
- 「御室仙元大士」碑（仙元大菩薩＝木花咲耶姫）
- 「磐長姫命」碑（木花咲耶姫の姉・五合目小御嶽社祭神）
- 「食行身禄尊師」碑（富士信仰の中興の祖）

笠神浅間神社の本殿石祠

台石　左面	左面	正面	右面	写真
岩井治〇 石川徳左エ門 鈴木重右エ門 岩井平兵エ 同　与五郎 同　与三郎 川森徳右エ門 同　由右エ門 岡田〇右エ門 岩井〇〇門 同　〇左エ門 岡田　文蔵 岩井作右エ門 同　長右エ門 岡田三右エ門	先達 長行真山 脇同 躰行金山 脇同 春山大行	台石正面 中　講	明治十四年十一月建之	
岩井治右エ門 浅尾半十郎 浅野与左エ門 篠塚源左エ門 長谷川〇〇 川森　清八 岩井治〇エ門 仝　久次 岡田長左エ門 五十嵐甚五兵エ 岩井源右エ門 〇〇三良左エ門 仝　庄左エ門 石川平左エ門 岩井　善蔵				

台石　裏面	台石　右面
徳島〇五兵エ 宇佐見清右エ門 岩井勘右エ門 同　政右エ門 同　〇左エ門 石川　利助 岩井〇左エ門 同　茂市 同　上右エ門 川上三良右エ門 同　甚左エ門 小川〇右エ門 岩井〇左エ門 冨山　佐七 岡田安〇エ門 吉川蔵〇エ門 出山六左エ門 岩井所左エ門 冨山　林蔵 清宮〇〇エ門 鈴木　勘兵エ	稲葉七良次 岩井六兵エ 冨山〇兵エ 出山四郎左エ門 篠塚新右エ門 同　又左エ門 岩井五左エ門 冨山甚左エ門 岩井定右エ門 押田忠右エ門 岡田　文治 岩井圭左エ門 清宮伊右エ門 鈴木重左エ門 岩井庄右エ門
〇〇甚兵エ 横尾茂右エ門 岩井大三郎 出山市右エ門 岩井半兵エ 同　源平 宮内〇〇八 〇〇〇〇 〇〇〇〇 〇〇〇エ門 出山五郎平 〇〇　市平 〇〇〇左エ門 〇〇〇〇郎 押田〇〇門 岩井〇次〇 同　〇兵エ 五十嵐治兵エ 岩井〇〇 同　〇兵エ 押田〇〇	岩井惣右エ門 篠塚庄兵エ 岩井　新八 篠塚又兵エ 岩井茂右エ門 同　八良兵エ 林田〇右エ門 出山〇右エ門 篠塚〇兵エ 石〇〇左エ門 〇〇〇〇平 〇〇〇〇エ門 〇〇〇〇〇門 〇〇〇〇〇兵エ 〇〇〇〇エ門 石工小林新田 梶〇吉五良

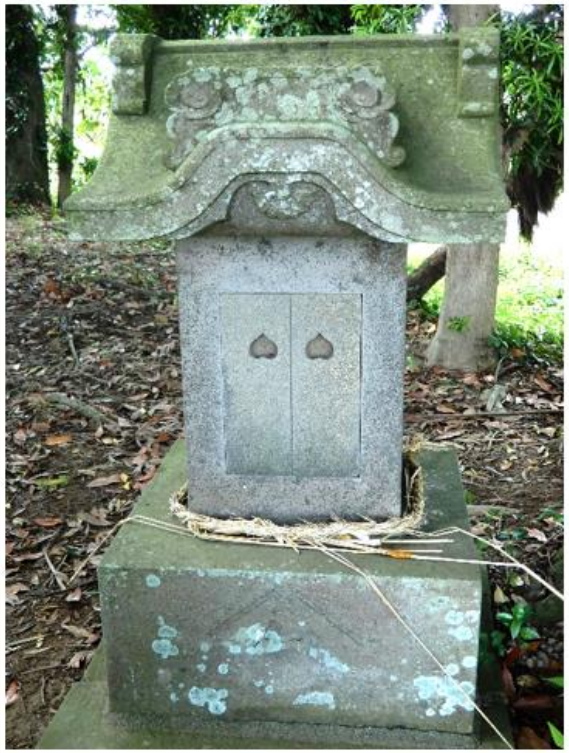
笠神浅間神社の石塔

「磐長姫命」碑
明治19年（1886）

「食行身禄尊師」碑
昭和6年（1931）

「御室仙元大士」碑
昭和9年（1934）

和泉屋氷川神社の富士講石祠（大正10年）

左面	正面	右面	写真
大願成就 訓導 木行平月 鈴木平助建之		大正十年六月朔日 おこたらず誠の道を辿りつゝ 神のみしるしとはにあおがん	
（台石左面）	（台石正面）	（台石右面）	
一等講長　小川重行 信　屋敷与行 鈴木利惣治 屋敷恒太郎 仝　泰助 石塚秀太郎 若尾政太郎 岩城調行 清水源七 者　岩井万藏 服部勝行 権少講義　真行秋月	（「山包」の印）		

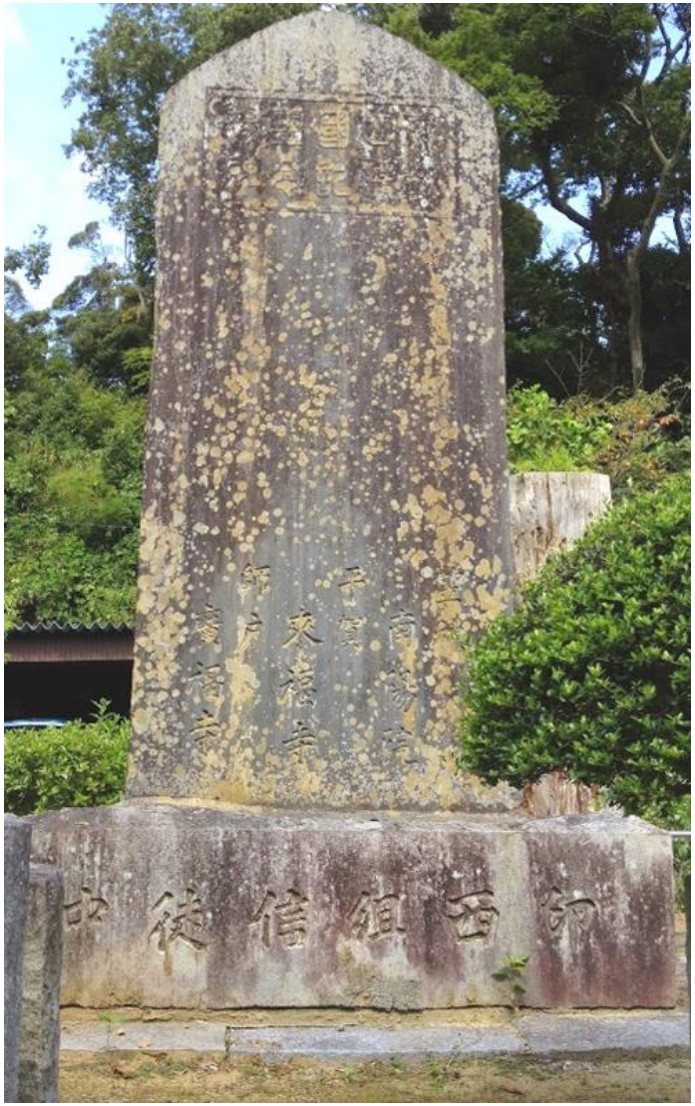
白井市内の富士講関連石造物

木・所沢鷲神社
コノハナサクヤヒメ神像碑（右　年銘なし）
小御嶽碑（左　年銘なし）

印西大師新四国霊場巡礼に関わる石造物

本埜地区に特徴的に多いのは、弘法大師石像、弘法大師供養塔（「南無大師遍照金剛供養塔」）など、印西大師八十八か所新四国巡礼に関連する石造物です。

- 印西大師新四国霊場は、昭和十年（1935）に建てられた笠神の南陽院の勧請記念碑によれば、南陽院の臨唱法印が享保6年（1721）に四国霊場から勧請して創設、その後天保元年（1830　碑文では「文政十三年」）南陽院の孝祐法印が再興し、88札所に弘法大師石像を配したといわれます。
  その範囲は、印西市全域と一部白井市域におよび、札所は88か所のほか番外70か所ほどあり、おおよそ160か所を巡行しています。
- 創設当時は、弘法大師の霊力にあずかり、水害や飢饉の苦しみから逃れ、同時に、死者の供養、自身の健康長寿を祈念した巡礼で、利根川下流域では、最も古い四国霊場写しでした。



勧請記念碑（新四國霊場）
昭和10年（1935）　笠神・南陽院

「印西大師新四国霊場巡礼」関連の石造物

印西大師の特徴は、先達寺の南陽院(笠神)、来福寺(平賀)、廣福寺(師戸)の3か寺が交代で出発と結願寺を受け持つことで、現在は、毎年４月１日から６日間行われています。

本埜地区の札所の数は重複も入れると、28か所で、そのうち15か所が番外です。

各札所には複数の弘法大師石像が、また巡礼の拠点となった地域には、「小廻組合」の弘法大師供養塔（「南無大師遍照金剛供養塔」）、また3基の霊場標石が2か所に建立されています。

なお、将監の密蔵院と安食卜杭青年館（覚了庵）の札所は、河内郡・北相馬郡・下埴生郡・印旛郡の旧下総国四郡にまたがる「四郡大師」(別称:布川組八十八ヶ所)の札所でもあります。

明治19年（1886）
弘法大師像　佐野屋墓地

弘法大師供養塔
明治35年（1902）中根・東漸寺

弘法大師供養塔

明治13年供養塔
行徳稲荷神社

明治28年（1895）
弘法大師供養塔
安食卜杭青年館

大正11年（1922）
弘法大師供養塔
塔荒野コミュニティセンター

「四国霊場」写の標石

天保2年（1831）
酒直ト杭　水神社　霊場標石
「新四國八十八箇所／土佐國定山奥院寫」
定山奥院は金剛福寺奥院で、現在は白山神社

明治5年（1872）
酒直ト杭　水神社　霊場標石
「新四國八十八箇所霊場／第六十五番／豫洲三角寺写」

明治5年（1872 ）霊場標石
中田切三区コミュニティセンター
「新四国八十八ヶ所霊場／第三十三番／土州高福寺写」
明治12年に雪蹊寺が再興されるまで納経は、31番竹林寺で「高福寺」の名でされていたという。

水神社

安政3年（1856）
安食ト杭の水神社本殿
「氏子中／天下泰平五穀成就」
「願主」は埜原の安食ト杭など7新田と松虫新田におよぶ

文久4年（1862）
本埜小林の水神社本殿
台石に「氏子中」と小林新田のほか4新田の名主・組頭の名が並ぶ

明治36年（1903）再建
甚兵衛の水神社本殿
「氏子中／埜原新田堤防組合拾九村」の銘あり、近代における治水史と埜原新田の結束、水神信仰の強さを物語っている。

弁財天

宝永5年（1708）
笠神弁天堂石祠
笠神村の施主12名の名。
谷津田の池の小島跡

元治元年（1864）（再建）
滝の山林内の弁才天石祠
瀧村32名と龍腹寺村1名の名
谷津頭の水源地で、ため池のほとり

文化3年（1806）
安食ト杭の刻像塔
「馬頭観音」ではなく、弁財天刻像塔か？

道祖神

寛保2年（1742）
滝315付近路傍の石祠
二股大根などが奉納

松木新田墓地の道祖神群
道祖神の石祠大小48基と残欠7個が集積

神像のある石祠

文化7年（1810） 中根 某家
熊野三神像石祠

家津美御子（けつみみこ＝スサノオ）・速玉（イザナギ）・牟須美（ふすび）の熊野三神の浮き彫り

天保2年（1831） 滝 稲荷神社
天神像石祠

近代の記念碑・顕彰碑

記念碑は個人または特定の集団が行った事績を後世に残すために、その内容を石碑に刻み付けたものでその内容は、地域に貢献した人の顕彰碑、義民碑、社寺の改修や催事、開拓や耕地事業を記念するもののほか、軍人の顕彰・慰霊やその他学校沿革など公共事業に関するものなど多岐にわたる。

明治から昭和期の建立が多く、明治初期の平石の自然石製から、大正・昭和期の石巻産のスレート石製の2mを越す大型の石碑へと変化していく。

近代の碑の表面には、社会的地位がある人や文化人が揮毫した「題額」に難解な漢文体の碑文・詩、撰文者・書者・刻者（刻文は地元安食卜杭の梶谷石材店の有能な技のよるものが多い）氏名などを、裏面には多数の寄附者の名を丁寧に刻んだ荘重なものが多く見受けられる。

近代の個人顕彰の記念碑は、近世からの筆子塚からの継承に始まり、次第に地域行政の貢献者の頌徳碑、そして文化人から軍人への顕彰対象が推移していく。

安食卜杭水神社には、江戸時代から印旛沼の開拓とその治水に心血を注いてきた下井新田の吉植家の幕末から明治時代の2代の顕彰碑がある。

平松基の筆子塚

裏面	正面	写真
發起人 龍服寺村 五十嵐慶一郎 別所邨　浅野保 萩原邑　石井濱之助	平松基之墓志 基名基德川幕府臣最上德内孫串戸氏之第二女 也年十八嫁平松其蚤世基固守節又不更二夫閉 居勉學頗通古今尤富國學傍善醫學維新之際從 主家而遊静岡教授後覺請益者甚衆後還東京有 故寓北總印旛郡別所邑浅野氏又應同郡龍服寺 邑五十嵐氏之請来再垂帷而遂老焉基資性謹厳 擧止閑雅常端坐一室教子弟以孝弟之道傍及動 作之節諄諄不倦嗚呼若基者真可謂女丈夫也矣 明治十五年十二月廿一日以病没享年六十八葬 於龍服寺邑堂山之塋法諡曰章盒院基本妙子大 姉於是門人等相謀欲建碑表之属余文余受基之 薫陶日久不得以文辭及記之以備桑滄以變 明治十六年十二月廿一日　石井濱之助謹識	

平松基女の筆子塚　明治16年(1883)銘

基は最上徳内の孫。維新後、龍角寺村五十嵐氏に招かれて子弟に教え、明治16年病没。

治水と開拓の功労者　吉植４代の顕彰碑

明治17年（1884）銘
「吉植翁碑」
安食ト杭　水神社
吉植庄左衛門顕彰碑

明治44年（1911）銘
「吉植翁頌徳碑」 安食ト杭　水神社
吉植庄左衛門の嗣子吉植庄之輔の顕彰碑
庄之輔嗣子の吉植庄一郎の頌徳碑は宗吾霊堂境内に建立

昭和27年（1952）
下井吉植家屋敷内
吉植庄亮（しょうりょう）の歌碑
「あしひきの山の きはらのゆふつく日　光となりてちる 木の葉あり」

義民碑

「三義侠者碑」
明治 24 年（1891）建立
笠神 南陽院

正保・明暦期の入会地「埜原」の帰属をめぐる小林村との実力闘争で、明暦2年（1656）に刑死した笠神の三義人（さんぎじん）を顕彰する。

明治24年にこの碑が建てられた背景としては、「義民佐倉惣五郎」物語がこの地域の偉人として称賛されたことや、江戸初期に村所属となった入会地が、治水が進み豊かな農地になったことへの感謝も要因であったと思われる。

白井市内の民間信仰の石造物

木・所沢鷲神社下庚申塚　寛文10年（1670）他庚申塔

地蔵尊像　平塚延命寺
宝暦6年（1756）

二十三夜塔　法目八幡社
嘉永6年（1853）

所沢鷲神社の石祠
左：延享3年天満宮　中：寛政9年天満宮　右：安永4年疱瘡神

道祖神　小名内稲荷神社　弘化3年

法目の道祖神

白井市内の主な民間信仰の石造物		
種類	基数	上段：最古　下段：最新
庚申塔	**271**	所沢鷲神社下庚申塚＆谷田庚申塚（寛文10年1670）
		折立・熊野神社　（昭和56年1981）
出羽三山供養塔	**88**	根・白井新田天神社　（明和８年1771）
		平塚・延命寺　（昭和59年1984）
馬頭観音塔	**91**	富塚鳥見神社　（宝暦２年1752）
		富塚木下墓地　（昭和48年1973）
道祖神	**31**	復・富ヶ谷鳥見神社　（享保15年1730）
		中台火の見　（昭和29年1954）
二十三夜塔	**28**	中木戸諏訪神社　（元禄11年1698）
		本郷集会所　（大正７年1918）
十九夜塔＆ 女人講如意輪観音像塔	**99**	平塚延命寺　（寛文10年1670）
		復・上長殿　（明治35年1902）
子安石祠	**3**	平塚鳥見神社　（寛政12年1800 ）
		今井青年館　（文政13年1830）
子安像塔	**54**	中木戸 観音堂　（文化6年1809）
		本郷集会所　（平成11年1999）

ご清聴ありがとうございました